



## キーセルパッハの Kisselbach's area 託つ無聊を打棄る

名誉院長 西 田 敬

年末年始、男どもには遣ることがない。勢い、家庭内の粗大ごみと成果てる。粗大ゴミの三種の神技。鼻腔内の清掃、即ち、鼻毛抜きやnose dirtを穿るなどに専念する。但し、実施に際しては、厭でも鼻腔近傍の静脈叢、即ちキーセルパッハのKisselbach's areaが気に為る。なにしろ破綻しやすく、大概の鼻出血の原因と見做される。鼻血と云えば、鼻栓つまり、タンポンが相場。但し、Kisselbach's areaからの出血は、研修医では手際良い止血は覚束ない。たとえ、耳鼻科の

専門医でも、未だ研修医の殻が脱げない新米の専門医では、smoothな止血には困窮する。出血点の電気凝固など新兵器はあるが、何せ、対象点が鼻腔内と狭小である。圧迫止血？タンポンも鼻腔内では不十分でベロックタンポンの如き荒業も、時に必要。斯くの如く、耳鼻科専門医の監視のもとでの鼻腔の清掃も気が退ける。思い悩む裡に鼻が乾いてしまう。

発想の転換を求めるならば、今を時めくObokata paper (Stimulus-triggered fate conversion of somatic cells into pluripotency) がお奨め。なにしろ、ある種の刺激で体細胞 (somatic cells) がgerm cellのような多潜能(pluripotential)へと逆分化するから、否応なしに、興味は募る。投稿先もNature誌、世界の超一流。日本の学会～社会で袋叩きにあったのは残念というか、御同情に耐えない。

